



「異常気象と人類の選択 (角川 SSC 新書 195)」

江守正多 著

角川マガジズ, 2013年9月
215頁, 800円(本体価格)
ISBN 978-4-04-731622-5

一読して、非常にユニークかつ興味深い著作であるとの印象を持った。著者は地球温暖化問題に関する科学者と社会のコミュニケーションに積極的に取り組み、多くの著作を刊行している(「天気」56巻4月号並びに59巻10月号に評者が書評を掲載)。

まず、本書の目次を示す。

はじめに

第一部 地球温暖化問題は今どうなっているのか

第一章 異常気象が増えている?

第二章 地球温暖化は本当か?

第二部 地球温暖化問題をこれからどう考えればよいか

第三章 対策積極派 VS 慎重派の対立構造をどう超えるか

第四章 誰がリスクを判断するのか

おわりに

著者は本書執筆の動機を「はじめに」において、概略、以下のように述べている。

『2010年頃から温暖化ブームの退潮期となり、特に東日本大震災を契機として温暖化 passing の状況となってきている。しかし、ブームが終わったことと問題が終わったことは別物であり、抜本的対策がなされない状況で温暖化は進行している。異常気象が頻発し大災害が生じないと、再び多くの人々の関心呼び、考え方をえるようにはならないのではないかと、危機感を募らせている。福島原発事故以前、世論が目を離している間に原子力発電に関する多くのことが「ムラ」の論理と相場観で決められてしまっていた。温暖化問題も似たような状況に陥る恐れがある。しかし、現代文明の運命にかかわる価値判断の問題を原子力の二の舞にしたくない。』

このような思いから著者は、本書を執筆している。

対策積極派と慎重派の二極対立構造にある地球温暖化問題を解決するため著者は、新たな視点「リスク選択」を提示し、市民自らが温暖化問題解決のための覚悟を示すべきであると訴えている。

第一部では、温暖化問題を論じる際の重要な2つの項目、「温暖化と異常気象」・「温暖化懐疑論」について、説明を行っている。

第一章では、気候システムの変動について基本的な説明を行うとともに、異常気象の長期的な変化傾向と温暖化の関係、異常気象の発生原因への温暖化の寄与に関する定量的な取り扱いの研究等を紹介している。続く第二章では、多くの温暖化懐疑論について詳しく分析し、代表的な懐疑論に対して問題点等を明確に指摘している。地球温暖化に関する著者の結論は以下のようにまとめられている。

①温暖化論が間違っている可能性はゼロではない。

しかし、間違っているという証拠は今のところない。

②温暖化論が正しいかどうかかわからないという人があるのは自然である。しかし、温暖化論が間違っているに違いないと断言する人は不自然である。

本書の核心部分をなす第二部で著者は、温暖化の政策論における環境重視の積極派と経済重視の慎重派の対立構造を分析し、論争全体の構造(「正体」と「カラクリ」)を示すと共に、「リスク選択」の視点からの新たな「論じ方」を提示している。

まず第三章で著者は、温暖化の政策論ではどうしても決着のつかない部分が残ることは有り得ることはあるが、現状は積極派と慎重派のお互いが他方を明確に否定しており、客観的に評価することが困難な状況となっているとしている。さらに政策論争を駆動している動機が存在が決着を阻んでいるとし、積極派は「行きすぎた現代文明の見直し」、「自然への畏怖」、慎重派は「現実主義」がその動機であるとしている。両派では温暖化問題というものの捉え方「フレーミング」がそもそも異なっており、積極派はカンクン合意(産業化以前からの世界平均気温の上昇を2°C以内に収める観点から温室効果ガス排出量の大幅削減の必要性を認識する)に基づいた「2°C」フレーミング、慎重派は「経済価値」フレーミングを用いて議論を行っており、この対立構造を乗り越えるためには一回り大きなフレーミングが必要であるとし、著者は以下に示すような「リスク選択」のフレーミングを提示している。

『われわれは、個人、組織、社会全体などさまざまなレベルで、どのリスクをどれくらい受け入れるかを判断して、リスクと付き合いながら生きている。温暖化の悪影響のさまざまなリスクや、温暖化対策にともなうコストやそれ以外のさまざまなリスクがある中で、それらのリスクを予断なく俯瞰的に眺め、どのリスクがどれくらい受け入れるかを判断することである。』

著者はこのフレーミングを使用することによって、どんな選択肢を選ぶにしても、その場合に生じるリスクを直視し、能動的にそのリスクと付き合い合うことができるとしている。

著者は、不確かさがきわめて大きい問題においては、専門家が社会に対して単純に「正解」を供給するのが難しくなっており、市民の持つ知恵「ローカル知」と専門家の持つ「専門知」を相互に学び合うことによって、判断に必要な知識が充実するとしている。専門家の持つ専門知識と市民の持つ価値判断をうまく融合させようとして、最終的な決定は政治が責任をもって行うのが理想的であると述べている。

また、リスク判断には「賭け」の側面があり、非合理的な判断が検討に値する価値を持つのは、多大な損失を引き受ける覚悟が伴う場合のみであると述べ、このような判断が行われた場合、専門家はそれを止める正当性を見出すのは難しいとし、これは、社会の自己決定権の尊重であるとしている。

このような市民の意見を政治に届けるためには、市民レベルの会議、討論型世論調査等が重要であるとし、これらの取組においては、社会の多様な主体の間の信頼関係を改善し、社会全体として少しでも納得感

が高い意思決定を導くことが重要であるとしている。

最後に著者は、「一市民が人類の将来について意見を持つとはどのようなことなのか」という問題について検討を行い、意見形成に重要な働きをする世代間衡平、世代間倫理、世代間正義などの世代間公共意識を引き出すためにも、政府と市民の間の信頼関係の構築の努力が不可欠であるとしている。

さらに著者は、「持続可能性」という言葉について、「なに」をいったい「いつ」まで持続するのかという問いかけを行い、持続可能の自明性を疑ってみている。思考実験としての「文明のターミナルケア」という考えを提示し、現在文明が持続するためには、われわれは「持続する」という選択肢を主体的に選び取らないといけない、持続可能であることを選び取って、次に、どのような方法で持続するかを選択することで、その選択にともなうリスクを人類は受け入れ、その選択の「責任」を負うのであるとしている。

平成25年1月17日に発表された文部科学省科学技術・学術審議会の建議「東日本大震災を踏まえた今後の科学技術・学術政策の在り方について」において、研究者等の「社会リテラシー」の向上が明記されている。研究者の「社会リテラシー」を養うためにも本書を読むことは非常に有益であると考えられる。地球温暖化問題を理解する上で欠かせない一冊である。多くの会員に一読をお勧めする。

なお、本書の内容をコンパクトにまとめた論考が「科学」（岩波書店）2014年2月号に「地球温暖化問題と社会の意思決定」として掲載されている。併せて読めば一層理解が進むものと思われる。

（（一財）日本気象協会 藤谷徳之助）